加賀藩の藩校・明倫堂と経武館の歴史と明治以後の高等教育の発展

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-10-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 板垣, 英治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00052400

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

加賀藩の藩校・明倫堂と経武館の歴史と明治以後の高等教育の発展

金沢市　板垣英治

一．加賀藩の藩校明倫堂、経武館および壮猶館

第五代藩主前田綱紀（つなのり）は学問・文芸の振興に力を注ぎ、多くの和漢書を蒐集していた。新井白石はじめ多くの学者を招聘し、中国・明の法律の研究のために書籍の注文も行っていた。さらに、ドドネウスの和蘭本草誌『Herbarivs off Cryydt-Boek』(1644) を求め、天和二年（一六八二）に和蘭・長崎商館長より入手していた（図1、図2）。

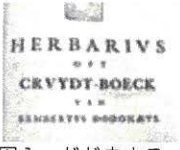

図1　ドドネウス
和蘭本草誌

図2　同誌、151頁
標題頁　金沢大学
医学部記念館

綱紀は京都の本草学者稲生若水（いのうじゃくすい）には博物書「庶物類纂」の編纂を命じた。稲生は中国の一七四種の典籍の鉱物と動植物関係の記述を広く収集・整理・分類して、元禄十年（一六九七）に執筆を始め、三百六十二巻を書き上げたが、完成を待たず死去した。

後に若水の子、稲生新助や弟子らが六百三十八巻を書き上げて、總計一千巻にわたる大著が完成した。本書（国の重要文化財）は幕府に献呈されたが、その写本の作成が許され、それが金沢市立玉川図書館に現在架蔵されている（図3）。本書はその後の江戸期の本草学に大きな影響を与えた。

このような学問への情熱は、第十代藩主重教（しげみち）に受け継がれ、天明六年（一七八六）一月から、城内で儒者による中国の聖賢の書籍―経書の講義が行われていた。

図3　『庶物類纂』稲生若水編著
金沢市立玉川図書館近世史料館

この意志を第十一代藩主治脩（はるなが）が受け継ぎ、京都から儒者新井祐登（白蛾）を招き、文武の学校の創建を着手させ、寛政四年（一七九二）二月に兼六園の傍に落成した。文学、皇学、歌学、医学、天文学、算学、礼法などを学ぶ「明倫堂」と、弓術、馬術、槍術、

剣術、柔術、居合、棒術などを学ぶ「経武館」が開設された。明倫堂には図4の扁額が掲げられていた。ここでの授業は寛政四年七月から始まったが、文政五年（一八二二）三月には仙石町（現・いしかわ四高記念公園内）に移った。

図4　「藩校明倫堂　扁額」
新井白蛾　記、金沢大学資料館
金沢市指定文化財.

図5　「学校」の印影

この二校は「学校」と呼ばれ、また蔵書印も『学校』であった（図5）。明治初年には、ここに壮猶館が合併されたが、三年十月には閉校となった。

本校の教育の様子は、「成瀬正居日記」（本学附属図書館蔵）に、成瀬が天保四年（一八四三）に十五才から明倫堂に入学して学習した様子が刻銘に記載されている。また、高峰譲吉も七才から明倫堂に学んだ一人である。本学校の設置目的は藩士の教育であったが、開設の達文には「四民教導」を唱っていた。

嘉永年間に外国船の来航による海岸防備の重要性が求められ、安政元年（一八五四）に加賀藩は上柿木畠（現知事公舎の地）に「壮猶館」を開設した。当初は和蘭砲術書および歩兵書による西洋兵学の教育・研究であったが、文久年間には黒川良安らにより和蘭医学書の会読も始まった。当時加賀藩の洋学の中心は壮猶館の翻訳方にあった。藩末期に壮猶館文庫には二百数十冊の兵学関係洋書や翻訳書が架蔵されていた（図6）。加賀藩の藩校の変遷を図7にまとめた。

図6　壮猶館文庫に架蔵されていた「化学書」

二　啓明学校と石川県中学師範学校

金沢の高等教育のパイオニア

明治四年（一八七一）の廃藩置県後、石川県は学制を改革して、私塾などの旧教育機関を廃止して、小学校卒業生の増加と、さらに高度の教育の必要性から新たに中学校教員養成を目的に、四年制の県立中学師範学校を同九年二月二十日に仙石町（現・いしかわ四高記念公園内）に開校した（図8）。この学校は「文物

ヲ渙発啓明セントスルコト」を目的として、「啓明学校」と名付けられた。ところが翌十年七月に「中学教員ヲ

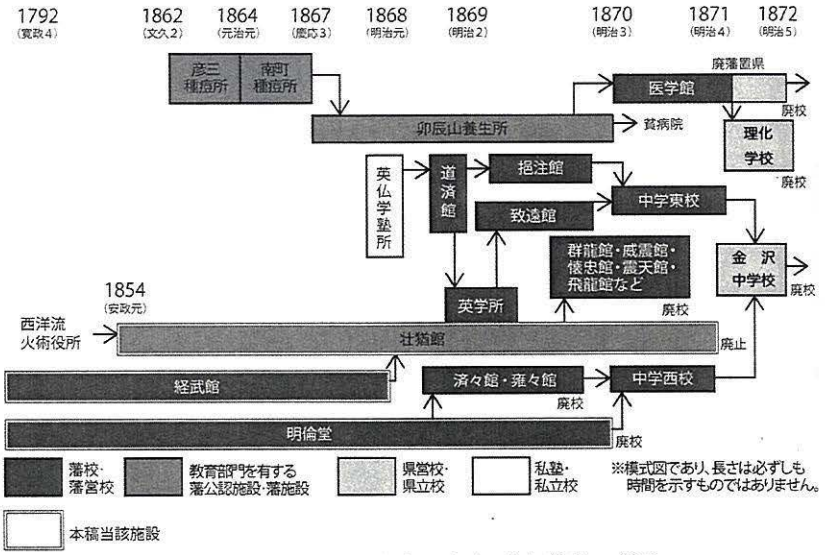

図7　幕末・明治初期における加賀藩校の変遷
金沢大学資料館「金大事始」2-11 より

陶冶センカ為メ」に校名を「石川県中学師範学校」と改めた。これは明治八年に東京師範学校に中学師範科が設置されたのに倣ったものであり、全国に他に例を見ないものであった。本校の職員は元石川県学務専任の野村彦四郎（鹿児島出身）と百束誠副校長（山形出身）、英人ランベルト（Edward Breville Lambert）教長、教諭八名、助教諭五名で構成され、入学生一六八名であった。

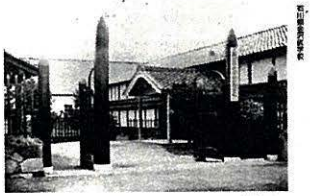

図8　石川県中学師範学校
明治 11 年撮影　宮内庁

教則によれば、甲と乙の二部制で、各々に下等の基礎教育二年間・四学期と、上等の教育科目五門、（普通全科、理化両学、外国語、政体学、農学）の二年間・四学期の教育が行われた。しかし、まだ洋学は盛んではなかった。教科が乏しいことから外国人を教長として、特に甲部では洋書を専ら用いて教育をした。ランベルトは十一年八月に帰国したため、後任には二十三才の米人ホイトニー（Willis Norton Whitney）が着任し教長として、英語、物理、化学の教育をおこなった。しかしその期間はわずか十一ケ月であり、翌年夏には

東京に去った。続いてウイン（Thomas Clay Winn）が着任した。

本校の教官で特に注目されるのは数学の関口開（ひらき）である。関口は加賀藩の藩校（西町軍艦所）で高等数学を学び、本校及び石川県専門学校で教鞭を執っていた。彼は和算をまず学び、継いで西洋数学を独学した。二十二冊に及ぶ数学書の翻訳・著作をした。なかでも明治六年に出版した「新選数学」は二十二万部も売れたベストセラーであった。『點竄（てんざん）問題集』編上下二冊、刊行明治五年。初版はアメリカのデーヴィス等の代数学書から抜粋し、編纂した代数の問題集で、加減乗除から二次方程式までが含まれている（図9）。関口の薫陶を受けたのが北条時敬（ときゆき）であり、石川県の奨学金を得て、東京大学理学部数学科に進学した。当時の東大の数学科の学生の半数近くは金沢出身で、関口の教え子達であったといわれている。卒業後は石川県専門学校で教鞭をとった。その教え子に西田幾太郎（哲学）がいた。西田は一時、北条家に寄宿して教えを受けた。さらに第四高等中学校では初めは理系で数学を学んでいた。西田にとって北条は生涯の先生であったと言われているくらい深い関係にあった。北条はその後、第四高等学校校長、広島高等師範学校校長、東北帝国大学総長（第二代）、および学習院院長を歴任した。徳田秋声もこの学校に在籍していた。

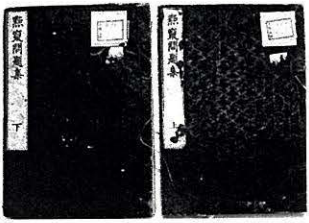

図9　関口開訳著、数学書
金沢大学附属図書館

文部省は明治十一年二月に全国の師範学校に物理学教育の振興を補助するために一組百十一点の米国製物理実験機器を交付した。本校に交付されたその機器の一部五十三点が、現在金沢大学附属資料館及び石川県自然史博物館に保存されていることが、近年の調査で明らかとなった（図10）。本校は僅か五年の存続で、明治十四年七月には石川県専門学校となり、高等の専門教育を目指した。

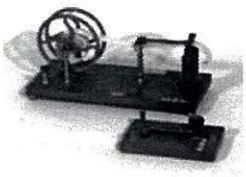
図10　モールス氏電信機模型　文部省交付物理実験機器

三．石川県専門学校　専門教育のはじまり

英才優秀の士を養成

石川県中学師範学校は、明治十四年七月に当初の開校目的を改めて「英才優秀の士を養成する」こととして、校名は「石川県専門学校」に改制された。本校は「専門教育を目的」とした公立学校として、全国的に見ても異色な存在であった。校舎は前記の中学師範学校を引き継ぎ、金沢市仙石町通三十七番地にあった。本校に関する資料は明治二十一年八月の「石川県から国への敷地・資産移管書類」（公文書）に詳しく書かれている（図11）。敷地千坪（三三〇〇㎡）に全校建物十棟（建坪五三三坪、約一七六三一㎡）の木造棟があった。

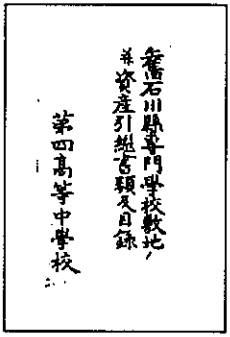
舊石川縣專門學校敷地
并資産引継書類及目録
第四高等中學校

図11.「引継目録」

明治十四年の教員は十四名であり、教諭は二名（法学士一名、理学士一名）であった。さらに明治二十年には、校長武部直松、教諭本間六郎（文学士）、今井省三（理学士、化学）、北条時敬（理学士、数学）の三名、外人英語教師一名と助教諭および助手十六名であり、教員構成の特徴は平均年齢二十三・七才と若輩で占められていたことである。当時の専門教育のための人材難をも映し出している。一方、この環境は生徒にとっては「家族的雰囲気」があったと好評な面もあった。本校は予備科三年と理・文・法科からなる本科三年の六年制を採り、初等中学校の履修者を試験の上で入学の許可をしていた。生徒総数は明治十四年に七十七名、十五年には一三七名、十八年には二三八名と増加した。

四. 第四高等中学校、第四高等学校

明治十九年四月に文部省より公布された「中学校令」により、全国を五区に分けて、各地に一校の高等中学校を設置することになり、同年十一月に設置区域の発表を行った。北陸地区は新潟、富山、石川、福井の四県が第四区となり、互いに激しい誘致活動を展開した。その結果、地元の強い教育熱意と石川県専門学校の歴史的系譜の重要性を文部省が認め、同年十一月に正式な設置区域と位置として、「第一区ハ東京、第三区ハ京都、第四区ハ金沢トシ、第二区ト第五区ハ追テコレヲ定ム」と発表した。さらに翌二十年四月には「金沢ニ設置スルモノヲ第四高等中学校ト称ス」と告示した。初めて「第四高等中学校」の名前が公表され

たのである。

翌年四月の「第四区内金沢ニ高等中学校ヲ設置」と決定されたことを受けて、本校の管理は石川県から文部省に移管された。これが第四高等中学校の始まりであった。専門学校の教育成果が高等学校の誘致に大きく寄与した。専門学校は明治二十一年三月末日に閉校された。

第四高等中学校の開校のために必要な資本金は、旧藩主前田利嗣氏から七万八千二三円余（現行換算推定値八千七百万円）が寄付された。地元有志による寄付金もあり、仙石町に赤煉瓦建ての新校舎が建設された。これは他の学区では見られなかった事柄であると伝えられている。

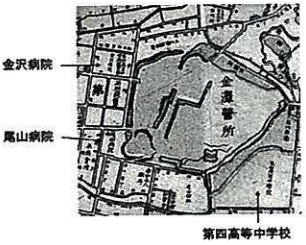

図12　第四高等中学校の位置
金沢市街之図（明治二五年六月発行）金沢市立玉川図書館・近世史料館蔵

明治二十年十月には、本校の開校記念式が仙石町の旧専門学校校舎で挙行された。『金沢市街之図』（同二十五年出版）（図12）には、現・いしかわ四高記念公園の一区画に「第四高等中学校」と記入されている。最初の人事は、初代校長は柏田盛文（元鹿児島県議会議長）、肬岡彦助舎監（元鹿児島県警察）、飯盛挺造教頭（物理学、東大卒、佐賀県出身）川上親晴幹事（鹿児島県）、徳永富教諭（鹿児島県）等が中枢を占め、明治新政府の影響を色濃く反映していた。

その他に石川県専門学校から本間六郎（英・独語、地理、歴史）、今井省三（英・独語、化学）および北条時敬（外国語、数学、金沢出身）等が着任した。

校舎は明治二十二年（一八八九）六月から新築工事が始まり、同二十六年十月に落成した。現在の国指定重要文化財である赤煉瓦建て「旧第四高等学校本館」（現石川四高文化交流記念館）は文部省技官であった山口半六と久留正道の両氏により設計され、明治二十四年八月に竣工した。図13は本館の完成直後の姿であり、本館の最も古い記録である。

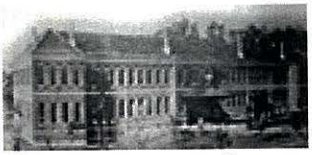
図13　創建当時の『第四高等中学校』の赤煉瓦建て校舎　国指定文化財

明治二十年十月に石川県専門学校在校生達は本校の

図14　木村栄（天文学）

入学試験を受け、学力により本科理科第一年に木村栄、井上友一を始め六名、予科第一級には藤岡作太郎、西田幾太郎、金田良吉、鈴木貞太郎（大拙）をはじめ十六名、同二級には二十四名、同三級には四十二名が入学した（図14）。これは郷土の誇りとすべきことである。この他多くの卒業生が東京大学に進学して、その後社会で活躍している。本校の教育は、当時専門教育のための和書や翻訳書が十分ではなく、英書での講義であった。教科書は学校で購入して生徒には有料で貸し出していた。本校には和書（一三七種、一二八九冊）および洋書（四五九種、一四八八冊）が架蔵されていたが、これらの洋書の内四一八種、五七五冊が現在も金沢大学付属図書館や金沢泉丘高等学校図書館等に架蔵されている。また物理学教育のための実験機器の多くが残され、当時の最新の教育の様子を偲ぶことができる。

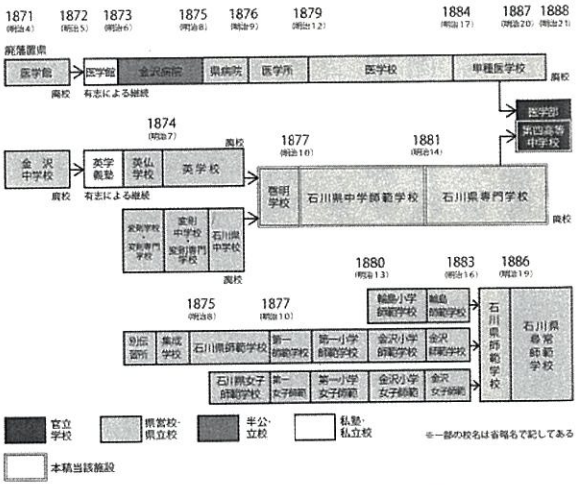

図15　明治初期の前身校の変遷
金沢大学資料館「金大事始」 2011

明治二十七年（一八九四）六月に「高等学校令」が公布されて、本校は「第四高等学校」に改称されたが、学校自体には大きな変化はなかった。本校設立当時の姿は「旧石川県専門学校敷地並資産引継書類及び目録、第四高等中学校」（明治二十一年）（金沢大学附属資料館蔵）に詳細に記載されている。

図15に明治初期の前身校の変遷をしめした。

五、金沢医学館、北陸での西洋医学教育の始まり

加賀藩は明治三年二月（一八七〇）に卯辰山養生所を金沢市大手町（現在の石川県健康センターの地）の旧津田玄蕃邸に移して、「金沢医学館」と改めて、オ

ランダ陸軍軍医P.J.A.スロイスを雇い入れて西洋医学の教育と患者の治療を行った（図16）。この医学館の建物は現在、兼六園の金澤神社前に「金沢城・兼六園管理事務所分室」として使用されている（図17）。加賀藩は、従来の藩医および医業に携わる者、また百姓・町人でも医術を心かける者は、この医学館に入学・勉学を許すとして、ここで医学を学ぶことを奨励した。

スロイスは明治四年三月に金沢に着き、早速、教育規則を決め、武谷俊三ら三人のオランダ語通訳を介して医学教育を始めた。教育は修業年限を五ヵ年として、基礎的な学科（解剖学、究理学、動物学、植物学、舎密学など十四科目）と諸分野の医学（病体解剖学、病理通論、外科通論、外科手術など二十九科目）を講義することとした（図18）。講義にはキンストレーキも使用された（図19）。

スロイスの授業は厳格であり、毎土曜日にはその週に習った事柄を試験していた。通訳者にはオランダ語の習熟を課し、スロイスの講義を習得して、彼の代わりに講義が出来る様になることを求めた。第一回の生徒は九名であり、藤本純吉、藤井貞為、稲坂謙吉らが含まれていた。彼らはその後金沢・高岡・大聖寺での西洋医学の普及・発展に貢献した。医学館は入学希望者の増加により理化学の教育を分離して行うために、兼六園内（現時雨亭付近）に「金沢理化学校」を明治

図16　P.J.A.スロイス
金沢大学医学部附属資料館蔵

図17　金沢医学館．明治11年頃に宮内庁が撮影した写真。門柱には「石川県金沢医学所」と書かれている。大正12年に兼六園内に移築された。

図18　Lubachの『動物学入門』（左）と藤本純吉が筆記した講義録「動物学」全．（右）
金沢市立玉川図書館近世史料館

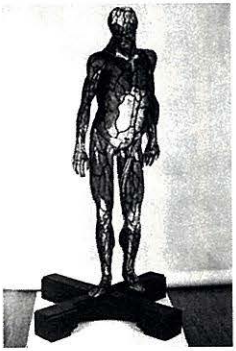

図19『キンストレーキ』紙製人体模型．佛国製、人体の講義で使用された。本体はわが国に4体現存するが、この模型がほぼ完全な状態で保存される唯一のものである。
金沢大学医学部記念館
金沢市指定文化財

四年七月に設立した。しかし、同年の廃藩置県により、藩立医学館は明治五年四月に閉鎖された。

この結果、津田淳三、大田美農里、田中信吾等は石川県に働きかけて、無条件で建物・器械の総てを借用して「私立金沢病院」を開設した。

明治八年六月には「石川県立金沢病院」、同九年八月に「石川県金沢医学所」に移り、同十二年十一月には「石川県金沢医学校」となり、隣接の地（旧殿町・現ＮＨＫ金沢放送局）に「金沢病院」を開設した。

明治十七年三月には厚生省の指示により「石川県甲種医学校」となり、同二十年四月に「第四高等中学校医学部」、同二十七年に「第四高等学校医学部」となった。明治三十四年に「金沢医学専門学校」として独立して、大正十二年に宝町に移り、「県立金沢医科大学」となり、昭和二十四年の「新制金沢大学」の発足により、「医学部」として組入れられ、現在に至っている（図20）。

図 20 『金沢医学館第一期生』
銅像と銘板写真（下）
金沢大学医学部

六. 石川県金沢病院と石川県金沢医学所
公立医学教育と公立病院のはじまり

加賀藩が設置した金沢医学館は、明治維新・廃藩置県のために存続の危機に見舞われた。所員達は私費で以て、その経営を支え、私立金沢県医学館として生き残った。さらに新たに生まれた石川県に医学教育と病院の存続を支援することを町民と共に要請した。その結果、明治八年六月に私立医学館は石川県立金沢病院に生まれ変わり、本県での最初の公立医学教育・医療機関となり、さらに明治九年八月には、石川県立金沢病院と石川県立金沢医学所となった。図17は当時の本医学所の姿を写す貴重なものである。

太田美農里が病院長に（図21）、田中信吾が医学所長に就き、それぞれは主任医師としても勤めた。スロイスの帰国後、オランダ・アムステルダムでの新聞広告により応募のあったホルトルマン（A.C. Holter-

man）（図22）が新たに雇傭され、明治八年八月に本院に着任した。通訳として原田俊三（旧姓武谷）、馬場健吉が就き、ホルトルマンは有機化学、眼科学、外科学、産科学、局所解剖学、中毒学、組織学、実験舎密学等の講義を行った。彼は非常に教育熱心であり、その講義は非常に緻密なものであったことが、その講義録から読み取ることが出来る。例えば、有機化学では基礎から薬用天然物、糖類、たんぱく質等の生体物質の化学、生理学、さらに発酵化学にまで及んでいた。パスツールの微生物（「顕微鏡的動植物」と翻訳）による糖のアルコールへの発酵説を紹介していたことは注目される。また彼は外科を得意として、当時の「外科患者治験録」によれば、16例の乳癌患者の治療を行ったことが記されている。

包帯学の講義は、津田淳三が原書を翻訳して、講義を行っていた。

図21 太田美農里

図22　ホルトルマン .A.C.

明治九年には分院として、富山に石川県富山病院が開設されて、院長には高峰精一（譲吉の父親）が就任した。また、福井にも石川県福井病院が開院した。金沢医学館の第一回の入学生であった藤井貞為（理学）、稲坂謙吉（生理学、動物学）、不破鎖吉（植物学、薬物学）、藤本純吉（病理学、内科学ほか）も巣立ち、北陸地域での住民の健康と医療に貢献した。

明治十一年十月二日に明治天皇は北陸ご巡幸で金沢を訪れた。翌三日午後にはこの金沢病院および金沢医学所を視察され、太田美農里所長およびホルトルマン等から祝辞を受けられ、さらに講堂での侍医と生徒との人体模型を使用した人体解剖についての問答をご覧になった。その際の様子が「石川新報」明治十一年十月四日版に掲載された。ホルトルマンは「陛下即位以来常ニ力ヲ尽シ、開化進歩セシメ、屡内国ニ変動起リシト雖モ、為メニ橈屈スルコトナク愈力ヲ進歩ニ尽クシ、各国挙テ驚嘆セザルハナシ、今ヤ日本人民ハ既ニ開化国ノ一部ニ位シ、終ニ欧米各国ト併立スルハ、外臣疑ヲ容レサルナリ」と褒め称えていた。大手町の現在の石川県健康センターの前庭には、このご巡幸の記念碑がある。

明治十二年九月には現・ＮＨＫ金沢放送局の地に、石川県金沢病院が新築・落成して、医学教育と疾病治療の機関はそれぞれに分離した。

なお、明治九年六月に金沢医学所附属薬学科が設置されて、薬学生の募集が始まった。これが本県の薬学教育の始まりである。

七．金沢医学校・金沢病院・尾山病院　・石川県甲種医学校

～オランダ医学からドイツ医学への変遷～

先に触れた様に、明治九年に石川県金沢病院は同じ場所で行っていた医学教育と患者の診療とを分離するために、石川県金沢医学所と石川県金沢病院とに分かれた。明治十二年春にホルトルマンが離任後、十三年夏にオーストリア人ローレッツ（A. van Roretz）を愛知医学校から招聘して、ドイツ語で衛生学と産科学を講義したが、講義は僅か三ヶ月間で終わった。この前年、明治十二年九月に金沢病院は医学所の後方、殿町松平大弐邸跡（現・ＮＨＫ金沢放送局）に洋風建築の病院を新築・落成した。この病院は当時の地図に金沢の新名所としてその建物が描かれた（図23）。この事業には太田美農里院長が建設資金を集めるために大いに貢献した。また、これを機に医学所を「金沢医学校」と改称して、新たに田中信吾が校長兼病院用掛となった（図24）。十二年十一月に石川県は医学教育の強化を目指して、田中を医務取り調べのために上京を命じた。翌年二月に彼が金沢に帰ると、直ちに医学教育制度及び規則の改革を行い、教員・吏員の新設を行った。これまでの医学校での修業年限を４年間に短縮して、国語で医学教育を行う学校となった。この上京はドイツ医学を学んだ医学士の金沢への招聘への前触れであったとも見られる。十三年八月には東京大学医学部の第二回卒業生である医学士外山林介と伴野秀堅が教諭として着任して、金沢で初めてのドイツ医学の講義が始まったが、僅か二年間で彼等は金沢を去っていた。明治十五年五月に、政府は医学校通則を改革して、

図 23『金沢病院』
加賀金沢細見図、
明治廿年四月、
金沢市立玉川図書館

図 24　田中信吾

図25「私立尾山病院」
明治十八年二月に博労町に開院

甲種医学校の制度を設けて、この学校の卒業生は無試験で医師免許を取得できるとした。ただし、この認可の条件として「少ナクトモ三名ハ東京大学医学士デアル」こととした。金沢医学校では十五年末から十七年にかけて木村孝蔵（外科）ら4名の医学士を新たに採用して、この条件を満たし、十七年三月に石川県甲種医学校に昇格した。病院は内科、外科、眼科、産科の四分科制を採用した。

このために田中信吾は校長の席を明け渡し、新たに岡山から中浜東一郎が着任した。分科制を行うこと、若い木村らが一等教諭として、田中らの上に位することから、新旧の職員との間には対立を生むこととなった。田中信吾翁碑銘文には「十二年十月、また金沢医学校長兼金沢病院長に転じ、声誉益々隆し。会当路の者と議して合はず。乃ち辞職す。是に於て同志と謀り尾山病院を建つ。衆推して院長を為す。」とあり、この間の経緯を表している。十七年十二月十一日に田中は「依願免本務並兼官」を石川県に提出した。明治十八年二月に田中は医員藤本純吉、伍堂卓爾、不破鎖吉らと医療器具や医薬品および蘭医学書を持って金沢病院を去り、隣接の博労町に私立尾山病院を開業した（図25）。この地は金沢病院から僅かの所にあり、多くの患者がここで診療を受けた。その後、石川県甲種医学校は明治二十年の第四高等中学校の発足により、同校医学部となった。一方、尾山病院は医員の死亡や老齢化により、大正元年十二月三一日に藤本純吉院長により閉院された。この様にして金沢でのオランダ医学はドイツ医学に置き換わって行った。

八．金沢大学の発足と総合大学への移行

角間新キャンパスへの移転

明治五年の学制改革以来の大改革が、昭和二十年八月に戦後のわが国の教育界を襲った。連合国軍總司令部（GHQ）は、これまでの教育制度をすべて廃止して、新制度の教育―いわゆる6・3・3制教育を行うことを勧告した。これに伴い各都道府県の公立旧専門学校や高等学校が廃止され、新制度に則した大学が設置されることになった。金沢では、第四高等学校、金

沢医科大学、石川工業専門学校、石川師範学校、石川青年師範学校、金沢高等師範学校を廃止して、新大学設置基準に基づき昭和二十四年五月に新たに男女共学の「総合大学」としての「金沢大学」が発足した。本学は医学部、薬学部、理学部、工学部、教育学部、法文学部の六学部となり、新制第一回の入学者は八一六名（医学部は別）であった。当時、旧制度の大学と区別するために、一般に「新制大学」と呼ばれた。その初代学長は戸田正二（京都帝国大学医科大学卒、衛生学）であった。

当時、学生は詰襟の黒色学生服、金ボタンには「大学」と刻まれ、「大学」文字の校章のついた角帽を頭にこの大学に通学するようになり、学都「金沢」にも大きな時代の変化が起きた。　大学教員の採用にあたり、各教員は資格審査の上で、新しいポストに就くこととなったが、各前身校からの教官が多くを占めた。昭和二十四年の全職員数は一七〇三名で、教授二〇二名中新任は僅かに三十二名であり、他は旧制学校からの者であった。しかし、当時のわが国の戦後の経済状態は良い状態ではなく、高等教育を受けることも経済的に容易なものではなかった。

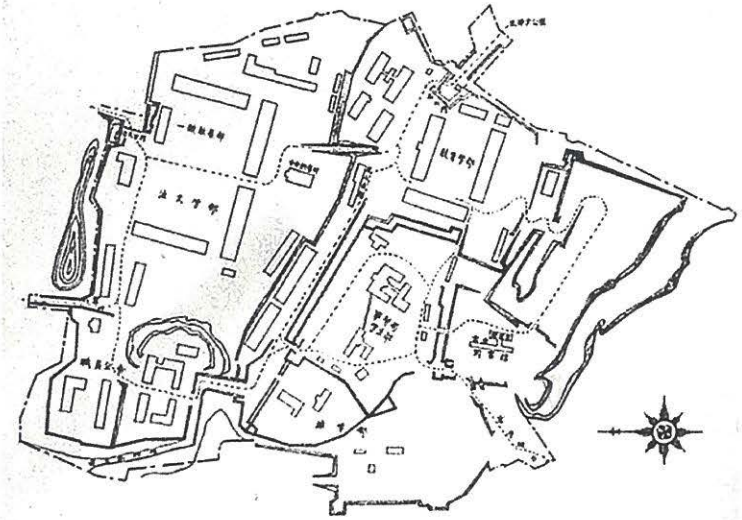

図 26　新制金沢大学の発足時の城内キャンパスの建物配置図

旧制度の学校が統合して新大学が生まれたために、一番頭を悩ます大きな問題はキャンパスであった。全国には「たこ足大学」の異名を持つものが多くあったが、本学も医学部、薬学部は宝町に、工学部は上野町、

理学部は旧第四高等学校跡の仙石町に、教育学部と法文学部、大学本部は旧第九陸軍師団跡の城内に旧兵舎を使用しての開学となった。全国の大学には、町中の自然環境に恵まれ、タヌキが住み、ギフチョウが舞う城跡の敷地にキャンパスを置くものは皆無であった。これがもとで城内キャンパス移転の際に、「お城の中にある大学を求めて金沢に来る学生がいるから、移転は反対だ」との意見を述べる教官がいた。戦後の大学キャンパスの整備は遅々としたものであり、城内の旧兵舎を使用していた。その当時の学部の配置図を示す（図26）。

戦後の高等教育の変遷は、本学では昭和三十八年にまず理学研究科修士課程の設置と、続く他の研究科修士課程の設置があり、さらに昭和六十年に自然科学研究科博士課程が設置され、はじめて旧制大学と同等なものとして教育・研究の環境が整えられた。城内キャンパスの角間キャンパスへの移転は、昭和五十五年十一月に決定され、法・経・文三学部、総合図書館が六十四年に、理学部、教育学部、本部は平成四年に、翌年に教養部が移転した。さらに平成十七年に薬学部、工学部の移転が行われ、初めて総合大学としての姿ができあがったのである（図27）。

最後に、この移転に携わった筆者は戦後の教育制度で学んだ一人であり、長かった戦後の教育改革がやっと終わったと深く感じている。しかし、大学が法人化され新たな改革が求められているのが現状である。本学の大いなる発展を強く期待し筆をおく。

注．本稿は金沢市刊行「第十五回藩校サミット」記念誌（平成29年9月）に掲載した拙稿の一部を改編したものである。なお、文献・史料は記載を略した。

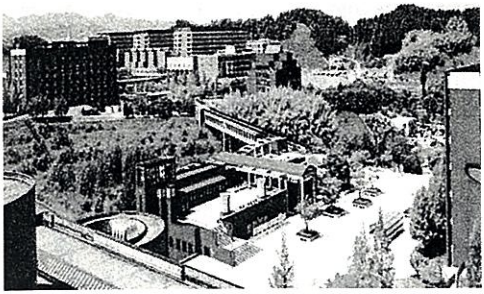

図27　現在の金沢大学（角間キャンパス）